

## 政権・転換期の主目標

聞き手・毎日新聞政治部

佐藤政権の末期、次の時代の到来を予感しつつ、政治、経済、外交について大胆に論じる。「日本の生存と繁栄の基礎は太平洋にある」と、のちの環太平洋連帯構想のアイデアが示されている。

## 資本乱舞は昔話

戦後、保守党はいろいろな政策をやってきましたね、道路も社会保障も……。しかし個々の政策内容に立入ってみると、栄養失調というかビタミンのバランスがくずれたみたいな症状……。

「そうね。各政策分野でそれぞれの建物ができましたね。しかし、いったん、でき上がるとそれ自身が生存権を主張し、それに利害がからみついて、政策の自由な選択を制約する。『財政硬化化』がしきりにいわれているが、その皮をはいでいくと制度、慣例、そして意識の硬化化があらわれてきますよ。これを打破しないと財政も柔軟な体質をとり戻すことができません。ぼつぼつ、決断せにやあかん時期が来たんじゃないですか。『食べる』余裕ができてこない、なかなか決断できないものですよ」

国会の予算の中に占める当然増経費の割合がだんだん大きくなって、新しい財政需要に応じられない状態がいわゆる財政硬直化

政治がやらねばならない問題はものすごくたくさんあるんでしようが、経済の高度成長にともなつて私的な利益と公共的利益をどう調整していくかということがとくに大事になつてきましたね。

(しばらく考え込んで)「うーん、どういふのかなあ。公益と私益の調和という問題は、いつの時代にもあつたが……」

たとえば、公害問題。

「そう、公害、それに土地、交通、これらが現代の社会的緊張の大きな原因になつていますね。ただね、このことは、公害問題に取り組むことができるほどに、わが国の経済的技術的力が大きくなつたともいえるんです。(強い口調で)公害が深刻になつたから経済の成長や近代化のテンポを落とすというような提起の仕方ではなく、公害問題を経済の運動の中に吸収し、拡散して、解決する工夫が望ましい。経済成長か、公害防止か といった二者択一でなくてね」

産業界の成長、発展によつて政治と産業のかかわり合いが大きくなつてきているでしょう?

「かかわり合いが大きくなるからといって、ただちに政治の産業への介入がジャスティファイ(正当化)されるものじゃあない」(持論らしく、確信ありげにいい切る)

ほう、なぜですか。

「産業界が大きくなるにつれて、そこには生涯を投じて悔いない第一級のエリートがほとんどはいつていつている。そういうところでは、セルフ・ガバメント(自治)が望ましい。政治が命令したり、支配してはならない。介入したからといって、うまくいかんね。政治はレフェリーのような役割を果

たすべきじゃあないのかね」

しかし、それでは大衆は『企業家性善説』を信じる以外にはない。

「政治は企業に対して、建設的な注文はしてもいいと思うんです。ただ、それは法律なんかで堅苦しくやるんじゃないかあなくてね。いかめしい態度ではなく、くだけた相談相手というところかな。政治は何をすべきか、何をやっちゃあならないか。そのあたりを分別する賢明さが大事だ」

大平氏が通産相時代、民間経済の巨大化に対応する通産行政のあり方をまとめて発表した

資本はどうしても利潤を追求する。その結果は現代が高密度社会だけに、国民生活に不都合が生じるのでは……。

「いまの経済のメカニズムの中で、際限のない利潤の追求などではせんよ。企業が長い生命力を維持していこうという場合、十九世紀のような資本の乱舞はやるうとしてもできない。そういうことを心配する必要はない」

衰退産業の発生も一つの問題ですね。わが国の中小企業も開発途上国が資本を輸入して力を付けてくると、そのうちに脅威を受けるようになるでしょうね。

「現に起こっていますね。労働集約的な産業、たとえば繊維などはしだいに新興国に太刀打ちできなくなってくる。農業などもそうですね。だからといって、いまは国際化時代なんだから、閉鎖的なことはできない。となれば、わが国の生きる道は、結局、高い道標を追求するということになるんじゃないか。つまり、重化学工業はもとより、品質のよいもの、意匠の凝ったものとか、一種の知識依存型だね。そして、開発途上国に対しては、日本の資本のはけ場にしようとか、経済的植民地にするとかいう時代は終わった。応分の協力はするとしても、低賃金を先方に求めて出ていく、これは危

険な道だね」

大平さんはかつては「政策をつくるのはわけないが、それを実りあるものにするのは大変なことだ」と力説されていましたね。

「うん、政策を作文するのに、それほど大きなエネルギーはいらない。頭のいいヤツにさせると、ひと晩でこの世を天国にするようなものができちゃう（笑い）。問題はマサツをしずめながら、利害を調整しながら、実効を本当にどこまであげるかという、そのお……舞台装置を用意することなんだ。これに九割以上のエネルギーがいる。いまは、政策過剰、作文過剰時代だよ。あること、あること、あふれとるが……。ワッハッハ」

ところで、現代の資本主義には景気後退とインフレが共存するという、かつての経済観では説明できない現象が起っていますね。果たして克服できますか。

「かつてのような景気の循環はなくなつた。経済の腰が重くなつてきた。しかしね、多数の人間をかかえた重装備の産業、大変な資本を投下した産業、そして、これらの産業が一定の操業率を守つていないと経済のメカニズムがもたないといった状態。一体、こういう産業の行方が天国か、それとも地獄か……。これ、ちょっと答えられないんじゃないか。運命はすべて神の手にある。われわれは切り替えがきかないんだ」

シベリアの広野で狼（おおかみ）にしつこく追われて、連れてくる犬を一匹ずつ手放して狼に与えていくような不安が……。

「そういう心配だね。ただ、心配はもつが、われわれは詩人ではない。これから先の運命は天にまかせて、歴史的現実をベストをつくして生き抜くだけなんだね」（演説口調、いわゆる大平調はとめどない）

## 『新しい統合』の時代

いまの自民党は、どうも国民的利益というものを追求しているとは思えない。圧力団体などに押されてしまつて……。

「その点は、自民党という政党は捨てがたい味のある政党ですよ。中国問題でも農業政策でも、保守的な考え方を誠実に主張している人もあれば、進歩的政策の採用を迫る人もある。結局、党首脳がその時点で間に合わせの対応策を考えるんだよ。それで、いったん決まると、党内はあまりがたびししない。比較的、柔軟な適応力をもっているのが自民党です。だから、指導者ももっている考え方でリードできるんです（強くい切る）。自民党はすぐれた頭目をいただと相当な適応力を発揮するはずだ」

それが今いますか……？

「そりゃ、わたしからいえんじゃあないの」（笑い）

ところで、福田さん（蔵相）は最近しきりに「心」の問題を持ち出してきますね。

「うーん。心というとあまりに一般的にすぎて、とらえにくいんじゃないだろうか。ぼくは、あの大学問題に接してみて、人間と人間の間柄をどのように結合するかがいまの根本問題だと感じた。これまで人間を結びつけてきた古いキズナが乱れをみせてきた。結合を促す力としては弱くなってきたということを露呈したのが大学問題だと思ふんです。その根本原因はなにかと考えたんだが、昔のよゆうな大学ではなくなつて、大衆社会の中で各学生が疎外されているというが、つまり、自分はあつ

てもなくてもいい存在、自分と大学との結合感がなくなってきた、という危機をあれは暴露したと思うんです。そうした変わった環境のもとで、新しいキズナを何に求めるかをみんなて苦悶（もん）している。それが、いうところの心の問題なんだろう。要するに、この世に生まれてきた以上は自分が一番大事なんだから、そういう人間がアウトサイダー（仲間はずれ）になっておるといふ事態はゆゆしい問題だ。だから家庭、職場、政治の社会でもどこでも、このアウトサイダーをつくらないようにすることが根本だろうね」

心の問題というところ、すぐ教育政策に直結させたがる……。

「それより先に、お互いに考えるということだ。政党でもそうでしょう。与党の独善、独走は許されない。それぞれの政党が生きがいを感じるようみんなが配慮していく。これがデモクラシーの根本だと思ふんだ。そういうことが比較的なおざりにされていたところに、いまの危機がある。大学問題でしみじみ感じさせられたねえ。うん」

大平氏は、これからの時代を『新しい統合』への模索の時代だ、と口ぐせのようについて

外交問題に移りましょう。戦後、四分の一世紀たって、国際政治にはどのような変化が起こっているとおみますか。

「そうねえ、単調な世界ではなくて多彩な世界になったね。社会主義国、自由主義国にはあまり増減がみられない。一方、新興国は社会主義でも、自由主義でもない、非常に個性的な生き方をしていく。こうした多極構造が一つのまとまりをもつのか、もたんのか、ちょっと見当がつかん。ただ、新興国の個性的な生き方がいろいろな困難にあい、そこから出る分別の中に、ある種の国際的な連帯というもの。それが世界的なものか地域的なものかわからないが、ともかくそういうものが生

まれてくるような気がするね」

日本外交の行動基準はなにに求めるべきでしようか、日本にとっていいことの基準ですな……。「いいことの基準ねえ。(しばらく考えこむ)つまり、軍事的に処理することであってはならない。非軍事的、政治的、経済的処理のために、日本も応分の役割を果たすということだな。しかしながら、非軍事的処理がいいとしても日本という国は未来があると同時に過去も背負っているんだから、われわれがやって効果のあることではなくちゃならん。他のアジア人は日本を畏敬し、羨望し、かつ憎んでいる。そういう状況を見きわめて賢明なマナーをとらねば……。救済援助にしても、先方の理解と納得の上に立つて出ていくべきで『援助してやるぞ』という態度はよくないね」

それなら、米国のカンボジア進攻をただちに やむをえぬ措置 とみなすのは、いささか問題があるのではないですか。

「ぼくは、アメリカがジョンソン以後、アジア政策の転換を決意したことは賢明であり、また、そうあるべきだと思う。こんどのカンボジアに対する措置が、そうした米国のラインを円滑にするための補助手段なのか、それとも逆行するものなのか、そこらあたりを事実で証明してくれないとねえ……。いまのところは材料不足で判断がむずかしいね」(慎重な口ぶり)

日本の対米協調のあり方が、これまでのままでいいとはいえないでしょう。

「日本はアメリカに甘え過ぎとつたわね、経済の面でも、安全保障の面でも。一方、アメリカももう日本を庇(ひ)護する余裕はない。逆にある部面では競争関係が始まっている。日米関係はこれからがあたりまえの姿になるんじゃないの。しかしね、日本の生存と繁栄の基礎は太平洋にある。この海域こそが日本の死活をにぎっている。(重々しい調子で)だから、太平洋沿岸諸国、とくに米国と

は緊密でなくちゃあならない。この基本は動かし得ない。米国は経済圏としてみても、ヨーロッパ圏をあわせたらいい力をもっている。本来四十も五十もあってよい国がたまたま一つなんだから。米国に片寄り過ぎているという批判はあたらんねえ」

三木武夫氏は外相時代、カナダまで入れたアジア・太平洋圏構想を打出したが、大平氏の場合、太平洋共同体のほうに力点をおいている

中国との共存関係の維持はどう考えますか。共存は可能ですか。

「平和のうちに共存するという基本路線は、どんなことがあってもくずしてはならない。それは日中両国の利益にかなうことなので、できないことはないと思う。ここで、われわれが用心しなくちゃあならないのは、かつて先輩がやったような中国の運命の形成に日本も参加するというような行過ぎをやっっちゃあならないということですよ（語気強く）。中国という偉大な民族の英知を信頼してね。ちゃんと礼儀正しいつき合いを通じて、平和共存を守っていく。表向きの国交がどうのこうのいう前に、信頼感が根本になくちゃあ……」

「できることと、できないことをハッキリさせ、そしてウソ偽りはいわずにつき合っていく……。」  
「そう、そう、そういうことですよ」（笑い、巨体をゆすぶり、繰り返しうなずく）

（昭、四五・六・三〜四）